

## 一節 = 「古典」

### [一・「源氏物語」]

「源氏物語」は、今から千年以上も前に女流作家によって書かれた「54帖（巻）の長編恋愛小説」だ。

恋の心理と人生観、そして自然の描写に優れた古典文学の最高傑作。

後世の文学に大きな影響を与えた。多くの伝統芸能の題材にもなり、映画、演劇、アニメ、漫画など広範な芸術、芸能分野で取り上げられている。

「源氏物語」は世界各国の人々にも愛読されており、32の言語に訳されている。

2008年11月には京都市で「源氏物語国際フォーラムⅡ」が開かれ、各国の翻訳者が参加、「源氏物語」について、「人間が書いたとは信じられない芸術的奇跡」、「時間を超えて生き続け、未来にゆだねられる作品」など、高く評価された。

「源氏物語」は平安時代の中期、一条天皇（在位896年～1101年）の中宮（皇后）彰子に女房（女性の召使）として宮廷に仕えた「紫式部」によって書かれた。

平安時代の前期・中期（10、11世紀）の宮廷生活と世相を描写しながら、主人公「光源氏」の、多くの女性との奔放な恋愛を中心にした栄華と苦悩の生涯を描いている。

「人間の愛と一生」を描いた「世界で最も古い恋愛小説」でもある。

「紫式部」は、滋賀県の琵琶湖のほとり、石山寺で「源氏物語」の想を練った。

寛弘3年（1006年）～寛弘8年（1011年）の間、長期にわたり執筆した。

「源氏物語」が最初に世に出てから1,000年の区切りの年の2008年（平成20年）、各地で「源氏物語」千年紀が催された。

「紫式部」が書いた「源氏物語」の自筆本は現存しない。

筆と墨で書き写された「写本」がいくつかある。

現在、読まれている本文は「大島本」（室町時代）が基になっている。

2008年7月には、奈良県内の大沢家が所蔵していた鎌倉時代中期のものとみられる全54帖の写本・「大沢本」が見つかった。

平安時代の代表的絵巻物に、「源氏物語」の興味深い場面の絵を加えた「源氏物語絵巻」がある。

## [作者]

「紫式部」は、天禄元年(970年)頃、学者「藤原為時」の娘として生まれた。

20歳を過ぎて「藤原宣孝」と結婚、当時としては晩婚だった。

長保3年(1001年)、結婚後、約3年で夫と死別し、その後、「彰子」に仕えた。

「彰子」(988年～1074年)は、一条天皇の時代に権勢をふるった「藤原道長」(966年～1027年)の娘で、後一条、後朱雀の二人の天皇の母に当たる。

「宣孝」との間に生まれた娘「賢子」は後冷泉天皇(在位1045年～1068年)の乳母となり、大式三位と呼ばれた歌人でもあった。和歌は「百人一首」に選ばれている。

「紫式部」には、「紫式部日記」、和歌集「紫式部集」もある。

## ～ [内容] ～

「桐壺」、「若紫」などの名が付いた長短54巻の物語は「三部」に分かれている。

### 第一部

～「光源氏」の誕生から39歳まで。「桐壺」～「藤裏葉」の33巻～

「桐壺の帝」は「桐壺更衣」を寵愛し、美しい皇子が誕生した。

しかし、間もなく母「更衣」は亡くなる。父「桐壺の帝」の考えによって皇籍を離れ、皇子は「源氏」という姓を賜り、光り輝くように美しいことから「光源氏」と呼ばれた。

「光源氏」は帝の保護と、その美しさから世の注目の的となるが、父「桐壺の帝」が亡くなると政治的に失脚し、都を離れて、須磨、明石に侘び住まいをする。

しかし、やがて都に呼び戻され栄達の道を歩む。

「光源氏」の栄華を象徴する六条院と呼ばれる広大な邸宅が造られ、39歳で太上天皇(位を譲り退位した天皇)に準ずる准太上天皇になる。

美貌と才能、資質によって人々の憧れの的だった「光源氏」の数多い恋の遍歴が「第一部」の中心。

「光源氏」は、世間の目を気にしながらも障害の多い恋や身分違いの恋に夢中になる。

父「桐壺の帝」に寵愛される藤壺(「光源氏」の継母)への反社会的な恋や、後に「光源氏」の最愛の妻となる「紫の上」を、まだ少女のうちにさらうように引き取って育てるなど、世間の常識の枠から外れた激しい行動も展開される。

一時、不遇にはなるが、「光源氏」は「第一部」で、恋と栄華を二つながらに手中にする人物として描かれている。

## 第二部

～「光源氏」の39歳から52歳まで。「若菜上」～「幻」の8巻～

六条院に安定した世界を作っていた「光源氏」のもとに、兄に当たる「朱雀院」の娘「女三の宮」が降嫁（皇族の娘が臣下に嫁ぐこと）した。

しかし、「女三の宮」は「柏木」という若者と密通事件を起こし、「薫」が生まれる。

「光源氏」と「女三の宮」の結婚に苦しむ「紫の上」（後に「光源氏」の妻）や、「柏木」の事件を知った「光源氏」の苦悩、また、「柏木」が煩悶の末、死を遂げるなど、「第二部」は、登場人物の内面の葛藤を鋭く描いている。

「第一部」は「光源氏」の栄華を描く「明」の世界であり、「第二部」は成功の奥にひそむ「暗」の世界だ。

「光源氏」は、「柏木」の死後、その子「薫」を自分の子として可愛がるが、「紫の上」が亡くなると出家を決意し、「光源氏」自身の物語は終わる。

## 第三部

～「光源氏」の没後の世界。「匂宮」～「夢浮橋」の13巻～

「第三部」の中心は、宇治十帖と呼ばれ、「薫」と、「光源氏」の孫に当たる「匂宮」の二人の青年貴公子と、都から離れた宇治に住む姉妹との恋物語が展開する。

「薫」は、姉妹の姉「大君」との結婚を望むが、「大君」は結婚を承諾しないまま死んでしまう。

「大君」を恋い慕っていた「薫」は、既に「匂宮」と結婚した妹「中の君」に心を寄せる。

「中の君」は「薫」を避け、姉妹の腹違いの妹で、「大君」によく似た「浮舟」を「薫」に紹介する。

ところが、「浮舟」は、「薫」と「匂宮」の二人と恋愛関係に陥り、悩んで入水自殺しようとしたところを助けられ、やがて出家する。

「第三部」では、登場する人々の長い会話や、心中の思惟（心の中で深く考えていること）によって、人物の心理を描き出し、行動を必然的なものになっている。

登場人物の複雑で、繊細な心の動きが躍動的に展開されている。



## 【歴史的意義】

九州大学名誉教授の今井源衛<sup>いま いげん へい</sup>氏は、「源氏物語への招待」(小学館。1997 年刊)の中で、「源氏物語」が、1000 年前に生み出されてから今日までの長い年月の間に「受難の時期が度々あった」と次のように書いている。

「儒教が幅をきかした江戸時代には、源氏物語は淫乱をそそのかす書物として散々、悪口を言われたし、50 数年前の敗戦以前までは、これまた皇室に不敬を犯したとって、軍部から非国民呼ばわりを受けた。しかし、その間にも読者はいつも大勢いたので、熱心な読者たちは、あるいは、明日の命も知れぬ戦乱の<sup>ちまた</sup>巷<sup>ちまた</sup>の中で、あるいは深山の僧坊<sup>しんざん そうぼう</sup>(僧侶の住居)で、また薄暗い女部屋で、五十四帖にのぼる長編を飽きもせず筆で写して、次の時代の人々へそれを受け渡していった。源氏物語はこうして今日までは無傷で伝えられてきた。その時々には現れた野蛮な権力者の力も到底、読者たちからその愛読書を取り上げることはできなかったのである」。

## ☆ 現代語訳

「源氏物語」の現代語訳は、これまでに与謝野晶子<sup>よ さ の あき こ</sup>、谷崎 潤 一郎<sup>たにざき じゅんいちろう</sup>、円地文子<sup>えん ち ふみ こ</sup>、田辺聖子<sup>た な べ せい こ</sup>、瀬戸内 寂 聴<sup>せ とうちやくちよう</sup> (本名・瀬戸内晴美<sup>はる み</sup>)ら著名な作家によって出版されている。

10 年の歳月をかけて「現代語訳『源氏物語』」を完成させた瀬戸内さんは、「作者の紫式部が宮廷で宮仕えする職業婦人というキャリアウーマンだったことを考えても興味深い。世界に類のない千年前の『源氏物語』の凄さをもう一度日本人一人ひとりに知ってもらうために、現代語訳に取り組んだ」と話している。



## [二・万葉集]

「万葉集」は、今から約 1200 年前(奈良時代)に編纂された「日本で一番古い和歌集」だ。

「万葉集」の書名は、文字通り、歌の数が多いという意味。

約 30 年間の 4,650 余首という膨大な数の歌が 20 巻に収められている。

自然の移ろいと偉大さ、人の闘いと死、さまざまな恋、妻子への愛など、森羅万象を歌い上げている。

「かな」がまだなかったために、漢字だけで一字一音表記の字を使う方法が考え出された。山を「也末」と書くなど、「万葉仮名」で書かれている。

作者は、天皇から庶民まで幅広いが、全体の約半数の作者は氏名不詳だ。

一般に万葉の時代は、7 世紀前半の舒明天皇から 8 世紀半ばの淳仁天皇までの約 100 年間。

「天皇を頂点とする中央集権国家」で、中国の法制にならった「律令国家」が形成される古代史の重要な時期。

旧勢力を排して革新を進めた「大化改新」(645 年)、朝鮮半島に出兵して大敗した「白村江の戦い」(663 年)、皇位をめぐって争われた「壬申の乱」(672 年)など、国内も国外も激しく揺れた動乱期だった。

7 世紀後半、持統天皇の時に「律令国家」が確立し、国力は充実した。

聖武天皇(8 世紀前半)の時、中国の盛唐(唐の第二期。713 年～766 年)の文化を積極的に取り入れ、華やかな天平時代を迎えた。

奈良県の東大寺や正倉院などに、当時の芸術の粋を見ることができる。

「万葉集」は、作者によって四期に分けられる。

一期(西暦 672 年・「壬申の乱」まで)は、舒明天皇、額田王など。

二期(710 年・平城遷都まで)は、持統天皇、柿本人麻呂など。

三期(733 年・天平 5 年まで)は、山部赤人、山上憶良など。

四期は、大伴家持など。

「防人歌」(辺境を守る人やその家族が詠んだ歌)や「東歌」(東国の民衆の歌)や、そのほか作者不詳の歌の多くは二～四期に属する。それぞれが顕著な特色を保ちながら、和歌の歴史を形成している。上代の日本人の精神史や、習俗、生活、または歴史の一端を見ることができ、「万葉集」は内容豊かな文学性と時代性を持ち合わせていることを物語っている。

編者は「大伴家持」を中心とする複数の人々、という説が有力だが、いくつかの段階に分けて編纂されており、統一性を欠いている。

和歌の形には、次のようなものがある。

- ① 日本の詩歌の主流を占めるのが「5・7・5・7・7」の31音・5句体<sup>たい</sup>の「短歌」だ。「万葉集」には約4,200首ある。
- ②「5・7」を反復して「7・7」で終わる6句以上で構成されるのが「長歌」。「万葉集」には約260首ある。
- ③「5・7・7」、「5・7・7」を反復するのが「旋頭歌」<sup>せどうか</sup>。  
「万葉集」には約60首ある。
- ④ほかに、「短歌」の「5・7・5・7・7」に「7」を加えた「仏足石歌」<sup>ぶつそくせきか</sup>がある。

## 《多彩な「歌人」たち》

「万葉集」の歌人たちは、歴史を背景に多彩な歌を作った。

「持統天皇（女性）」は、奈良の香具山<sup>かぐやま</sup>に登って大和を眺めながら、国土を讃美し、繁栄をあらかじめ祝福する雄大な長歌を残した。

春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣干したり 天の香具山

【春が過ぎて 夏が来たらしい 真っ白な衣が干してある

あの天の香具山に】

=季節の推移を楽しみ、宗教的で厳粛な意味をも感じた奈良時代の人達の心が、明るく堂々と、格調高く歌われている。

この頃に活躍した「柿本人麻呂」は、「万葉集」を代表する歌人だ。

天皇の行幸<sup>ぎょうこう</sup>について行った奈良県・吉野で、神話的発想に基づく天皇讃歌を作った。また、皇子や皇女の旅など、さらに薨去<sup>こうきよ</sup>（皇族の死）に際しても長歌を献上するなど、朝廷を歌の場として、優れた才能を発揮し、渾身の力で歌い上げる歌風を樹立した。このため、宮廷歌人と呼ばれる。

去年見てし 秋の月夜は 照らせども 相見し妹は いや年 離る

【去年の秋に見た月は、今も明るく照らしているけれど、この月と一緒に見た私の妻は、離れて遠くへ逝ってしまった】。

同じ系統の歌人に、「笠金村」<sup>かさのかねむら</sup>、「車持千年」<sup>くるまもちせんねん</sup>、「山部赤人」<sup>やまべのあかひと</sup>がいる。

「山部赤人」は「柿本人麻呂」とは違った儀礼的な歌の中に自然を繊細な感覚でとらえて詠み込む叙景という新しい分野を切り開いた。

「柿本人麻呂」以前の万葉歌人に「額田王」<sup>ぬかたのおおきみ</sup>がいる。

「額田王」は、天智天皇、天武天皇兄弟から愛された女流歌人。  
天皇に代わって次の歌を作った。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

【熟田津で 船出しようとして 月の出を待っていると 潮も幸い満ちてきた さあ漕ぎ出そうよ】

（熟田津=現在の愛媛県道後温泉付近にあった船着場）



＝月と潮(海)によって象徴される空間の壮大さ、「今は漕ぎ出でな」と、人々を誘う緊張感のあふれる詞<sup>ことば</sup>に、万葉の精神の高さが表現されている。

中国に留学した経験を持つ「山<sup>やま</sup>上<sup>のうえ</sup>憶良<sup>のおくら</sup>」は、漢詩文や、仏教・儒教などに関する豊富な知識を持ち、思索的な歌を作った。貧困、病、老、死という人間の弱点や現実をテーマに、強烈な個性を表現した。

宮廷歌人とは異なる新しい歌が生まれた。

「万葉集」の最後を飾る「大伴家持<sup>おおとものやかもち</sup>」は、没落する家運の中で、心の慰めを歌に求めた。

春<sup>その</sup>の苑<sup>くれな</sup> 紅<sup>い</sup>にほふ 桃の花<sup>した</sup> 下照る道に 出で立つ乙女

【春の庭園の 紅色に美しく照り映えている 桃の花 その木の下までも

あかく映<sup>は</sup>えている道に 出て立っている少女よ】

＝幻想的で、絵画的な美が歌われている。

わが宿の いささ群竹<sup>むらたけ</sup> 吹く風の 音のかそけき この夕べかも

【わが家の それほど多くもない群竹(群<sup>むら</sup>がって生えている竹)に吹く風の音のかすかなこの夕方よ】

＝夕方の静寂の中で鋭敏になっていく孤独で内省的<sup>ないせいいてき</sup>な心<sup>こころ</sup>の感覚を歌っている。平安時代の文学意識である「雅<sup>みやび</sup>」の精神に通じ、抒情性が高い。

平安時代以降、歌は貴族社会を中心としたものだった。

しかし、「万葉集」には、身分の低かった民衆の歌も多く残されている。

家族と離れ、遠く北九州沿岸、壱岐<sup>い き</sup>や対馬<sup>つしま</sup>(今の長崎県)で防人<sup>さきもり</sup>(辺境を守る人)となった農民の歌がある。

父母<sup>ちちはは</sup>も 花にもがもや 草枕<sup>くさまくら</sup> 旅は行くとも 献<sup>ささ</sup>ごて行かむ

(「草枕」は旅の枕<sup>まくら</sup>詞<sup>ことば</sup>)

【父母が 花だったらいいなあ 旅に行っても 捧<sup>ささ</sup>げるように大事に持って行くのに】

＝両親と別れる辛さを率直に歌って、人の心を打つ。純粹で素朴な姿が伝わってくる庶民の歌だ。

### [三・「枕草子」]

「枕草子」は、平安時代の和漢(日本と中国)の学識深い才女「清少納言」の随筆集だ。  
女性的な鋭い観察と写実による才気あふれる筆致による枕草子は、同じ女性の「紫式部」による「源氏物語」とともに、平安文学の双璧だ。

#### 作者＝清少納言

「清少納言」は、康保年間の966年頃に生まれ、万寿年間の1026年頃、60歳前後で亡くなった。

「清原元輔」の娘だが、本名は不詳。「清原元輔」は、村上天皇(在位、946年～967年)の命令で後撰和歌集を編集し、漢字だけで表記した「万葉集」の歌に「読み」を付けた歌人だ。

また、「清原元輔」の祖父「清原深養父」は古今和歌集の歌人。

「清少納言」は正暦4年(993年)の冬に、一条天皇の中宮(皇后)「定子」(976年～1000年)に女房(女性の召使)として仕えた。

「枕草子」は、天皇の妃としての幸福な生活から悲運の皇后として寂しい境遇に陥った「定子」の存在なしには考えられない。

宮廷での女房の呼び名は、父「清原元輔」が「少納言」という官職だったことから、「清」と「少納言」を合わせて「清少納言」と呼ばれた。

教養のある「定子」と意気投合し、「定子」の寵愛を受けた。

「定子」に対する絶対的な献身と賛美、そして、主従の美しい心の交流が「枕草子」を生む素地となった。

「清少納言」の兄の内大臣「伊周」から草子(紙を綴じたもの)を献上された「定子」が、「何を書こうかしら」と「清少納言」に尋ねたところ、「枕にこそは、はべらめ(枕でございましょうね)」と答えたので、「清少納言」に草子が与えられた。

草子に書き綴ったのが「枕草子」だ。

しかし、「枕」が具体的に何を示しているか、はっきり分らない。

「枕草子」の言葉の意味は、「手元に記録して、身近に置いて離さない備忘録のようなもの」、「題詞(書物の巻頭などに書く言葉)を集めたもの」、などだ。

「清少納言」は、「定子」の死後、間もなくして宮中を退いたが、その後は不明。晩年は剃髪出家して、寂しい生活を送ったらしい。「清少納言」には和歌集がある。

#### 時代背景

「清少納言」が仕えた「定子」の父「藤原道隆」は、天皇を補佐する最高の職である関白として「中の関白」と呼ばれ権勢を誇った。

「定子」は正暦元年(990年)、15歳の時に11歳の一条天皇に入内(天皇の住む皇居に入る)。兄「伊周」、弟「隆家」も若くして要職についた。



しかし、「藤原道隆」は長徳元年(995年)4月に43歳で亡くなり、関白には「定子」の叔父(「道隆」の弟)「道兼」がつく。「道兼」も7日後に疫病に倒れ、同じ叔父(「道兼」弟)「道長」に政権が移る。「道長」は、「源氏物語」の作者「紫式部」が仕えた中宮「彰子」の父。

次の年の長徳2年正月、「伊周・隆家」兄弟が花山天皇(「道兼」にあざむかれて退位し、出家)に不敬を働いたとして、地方に下され、「中の関白」家は没落する。

「定子」は、後見の父を亡くし、頼みとする兄弟も都を追われ、後ろ盾をなくす。それでも、一条天皇の寵愛は変わらず、兄「伊周」らが左遷された同じ年の12月に第一御子が生まれ、その後も二人の御子が誕生した。

しかし、一家の悲運に遭った「定子」は、「道長」の娘「彰子」が入内し、中宮になるのに伴って皇后となり、最後は下級官吏の邸に身を寄せた。

そして、2年(1000年)12月16日、第三御子の出産の後、25歳で亡くなった。遺言により火葬は行われず、鳥辺野(平安時代の埋葬地)への葬送の夜は降りしきる雪が「定子」の棺を覆ったという。

「清少納言」は、宮仕えをした7年の間に、「中の関白」家が権勢を上りつめ、急速に没落する中で、「定子」に仕えた。

「紫式部」は、「清少納言」が宮仕えをやめた数年後の1005年頃、中宮「彰子」に仕えた。

## ～ [内容] ～

「枕草子」の文章は、長短さまざま。約300段あるが、次の「三つ」に分類される。

### ① 「清少納言」が宮仕えをしていた間の出来事を記した「日記的章段」

「清少納言」の体験に基づいた宮中での生活がほとんどだ。

「清少納言」は、華やかで理知的な「定子」の後宮(宮中の奥の方にある皇后、妃などが住む館)の中で生き生きと活躍する。

「定子」周辺は社会の状況に関わりなく機知を重んじ、華やかさを失っていない。

「定子」と「清少納言」の個性が反映している。

### ② 「～は」、「～もの」という書き出しで、類似したものや事柄を

挙げていく「類聚的章段」(類聚＝同じ種類のものを集めること)

「～は」という形式では、「山は」、「虫は」などのように、テーマを決めて、その後に、それぞれについての名前を列記して、その善し悪しを評価する。

「～もの」も同じ形式だが、「～は」が具体的な事物を中心に行っているのに対し、「にくきもの(憎らしいもの)」、「うつくしきもの(可愛らしいもの)」など、抽象的、主観的なテーマを取り上げて、それが、なぜ憎らしいか、なぜ可愛らしいか、を述べる。

「類聚的章段」は、作者の価値判断の集大成だ。

### ③ どちらにも属さない「随想的章段」

自然美や人生観などの文章は、「五月の山里を牛車<sup>ぎつしや</sup>で歩いた印象」や「垣間<sup>かいま</sup>見た恋人たちの朝の別れ」など、スケッチ風の描写が優れている。

内容については、「作者、清少納言の個性の記録」とみるか、「定子の後宮<sup>こうきゅう</sup>周辺の記録」と捉えるかで、「枕草子」の評価は異なってくる。

作者の自慢話も、「定子周辺の記録」として読むと、「清少納言」は中宮「定子」の価値基準にすべてを委ねたことになる。

## ※「枕草子」の「第一段」と現代語訳 ※

春はあけぼの、、、

<現代仮名遣いで表記>

春はあけぼの。ようよう白くなりゆく、山ぎわすこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。闇もなお、ほたるの多く飛びちがいたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもおかし。雨など降るもおかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして 山の端<sup>は</sup>いと近<sup>ちこ</sup>うなりたるに、鳥の寝どころへ行くのとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさえあわれなり。

まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとおかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はた言うべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとききづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。



### 【現代語訳】

春は夜明けが一番趣がある。だんだん白々と夜が明けてゆく峰近くの空が少し明るくなって、そこに紫がかった雲が細くたなびいているのが素晴らしい。

夏は夜がいい。月の出ている間がおもしろいのは言うまでもない。闇夜の時でも、蛍がたくさん乱舞している光景はおもしろい。また、ただ蛍<sup>ほたる</sup>が一匹、二匹、かすかに光りながら飛んで行くのもおもしろい。雨が降る夜もおもしろい。

秋は夕暮れがいい。赤い夕日がさして、山の端に落ちかかったころ、鳥がねぐらに帰ろうとして、三羽、四羽、また二羽、三羽と急いで飛んで行く姿さえも、しみじみとした趣がある。

まして、雁などが列をつくって空高く飛んで行き、たいそう小さく見えるのは、まこと

におもしろい。日がすっかり沈んでから、風の音や、虫の声などが聞こえてくるのは、これもまた、改めて言うまでもなく趣のあるものだ。

冬は早朝に限る。雪の降っている朝のおもしろさは言うまでもなく、霜が降りてたいそう白い朝もいいし、また、雪や霜がなくても、大変寒い朝に、火などを急いで起こして、炭火を持って御殿<sup>ごてん</sup>の廊下などを運んで行く情景も、いかにも冬の朝に似つかわしくよいものだ。しかし、昼になって、だんだん寒さがゆるんでくると、丸い火鉢の火も、誰も面倒を見ないので白い灰が多くなって、よくない。



## [四・「百人一首」]

「百人一首」は、100 人の歌人の和歌(短歌)を集めたもの。

すべてが流麗で、人の心を魅了する。日本文学の古典として高く評価されている。

『歌かるた』としても親しまれている。

鎌倉時代の歌人「藤原定家」(日記「明月記」の作者)が1235年(文暦2年)に、天智天皇から順徳院までの約570年の間に、高貴な人、歌人など100人(8人の天皇、15人の僧侶、21人の女性など)が詠んだ和歌から、時代順に、一人・一首、計100首選んだもの。

「百人一首」は「小倉百人一首」のこと。歌を色紙に書き、京都・嵯峨にあった小倉山荘の障子(襖)に貼ったことから「小倉」の名前が付いた。

「小倉百人一首」はすべて、天皇の命令で選ばれた「勅撰和歌集」から集められている。内訳は、「古今和歌集」が24首、次いで、「後拾遺和歌集」14首、「新古今和歌集」14首、「千載和歌集」14首、「拾遺和歌集」11首など。

内容は、恋の歌が43首で最も多く、次は四季の歌が32首。



### 《「百人一首」の12首(時代順)と現代語訳》

☆ 田子の浦に うちいでて見れば 白妙の

富士の高嶺に 雪はふりつつ (山部赤人)

【田子の浦に出て眺めると真っ白な富士山の高い嶺に今 雪が降りしきっている】

(田子の浦＝静岡県富士市南部の海岸)

☆ 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の

声聞く時ぞ 秋は悲しき (猿丸太夫)

【奥深い山の中で 敷き詰めたように散っている紅葉を踏み分けて、鳴いている鹿の声を聞く時こそ 秋の悲しさがひとしお身にしみて感じられる】

☆ 花の色は うつりにけりな いたづらに

わが身世にふる ながめせし間に (小野小町)

【桜の花の色つやはすっかり色あせてしまったなあ 何もしないで降り続く長雨を眺めながら物思いにふけている間に 自分の容色もいつの間にか衰えてしまった】

☆ 君がため 春の野に出でて 若菜つむ

わが衣<sup>ころも</sup>手に 雪はふりつつ (光<sup>こう</sup>孝<sup>こう</sup>天皇)

【あなたに贈ろうと 早春の野に出て若菜を摘んでいると 私の着物の袖に 淡雪がしきりに降っていましたよ】

☆ 月見れば ちぢに物こそ かなしけれ

わが身ひとつの 秋にはあらねど (大<sup>おお</sup>江<sup>え</sup>千<sup>ち</sup>里<sup>り</sup>)

【秋の月を眺めていると あれこれ とめどなく物ごとが悲しく感じられる 秋は自分だけに訪れるというわけでもないのに】

☆ ひさかたの 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花のちるらむ (紀<sup>きの</sup>友<sup>とも</sup>則<sup>のり</sup>)

【日の光がゆったりとしている春の日なのに 桜の花はどうして落ち着いた心もなく 散り急ぐのだろうか】

☆ 人はいさ 心も知らず ふるさとは

花ぞ昔の 香ににほひける (紀<sup>きの</sup>貫<sup>つら</sup>之<sup>ゆき</sup>)

【あなたの心はどうでしょうか 分かりません しかし 昔なじみのこの地では 梅の花が昔のまま美しく咲き いい香りを放っている】

☆ 忍ぶれど 色にいでにけり わが恋は

ものや思ふと 人の問うまで (平<sup>たい</sup>兼<sup>いら</sup>盛<sup>かねもり</sup>)

【私の恋は誰にも知られまいと隠していたけれど とうとう顔色に出てしまった 物思いをしているのですか と人が尋ねるくらいに】

☆ 逢<sup>あ</sup>い見ての 後<sup>のち</sup>の心に くらぶれば

昔はものを 思はざりけり (権<sup>ごん</sup>中<sup>ちゅう</sup> 納<sup>な</sup>言<sup>あつ</sup>敦<sup>ただ</sup>忠)

【思いがかなって逢ってから切ない恋しさに比べると 逢う前は大事な物思いをしなかったのだなあ】

☆ 君がため 惜しからざりし 命さへ

長くもがなと 思ひけるかな (藤<sup>ふじ</sup>原<sup>わらの</sup>義<sup>よし</sup>孝<sup>たか</sup>)

【あなたに逢うためなら死んでも惜しくはないと思っていた命ですが 逢うことができた今は 長生きしたいなあ とつくづく思う気持ちになりましたよ】

☆ めぐりあひて 見しやそれとも わかぬ間に

雲がくれにし 夜半の月かな (紫式部)

【ひさしぶりにお目にかかって

あの人かどうか見分けがつかない間に急いで帰ってしまったあなたは  
まるで雲に隠れてしまった夜中の月のようですね】

☆ 瀬を早み 岩にせかるる 滝川の

われても末に 逢はむとぞ思ふ (崇徳院)

【川の瀬の流れが速いので

岩にせきとめられて二つに分かれた急流が

やがて一つに合流するように 私たちも今は別れ別れになっても  
行く末は必ず再び逢いたいと思っているよ】

## 【「百人一首」の「競技かるた」】

1543年(天文12年)に種子島(鹿児島県)に漂着したポルトガル人がもたらした「かるた」と「百人一首」が結びついた室内遊戯のこと。

「百人一首」の「競技かるた」は、「短歌と作者の名前と絵」が書いてある「絵札」100枚と、「五・七・五・七・七」の「下の句、七・七」が「ひらがな」で書いてある「字札」100枚で出来ている。

### ※ 一般的な遊び方

- ①100枚の「字札」(取り札)をテーブルや畳に並べる。
- ②「読み手」が、「絵札」(読み札)の和歌を読み上げる。
- ③2人以上がそれを聞きながら、並んでいる「字札」を取り合って競争する。

取った「字札」の数が多い者が勝ち、となる。

2人で「字札」を取り合う「百人一首」の「競技かるた」は、第一回が明治37年(1904年)に開かれ、大正時代から昭和初期にかけて全国的に広まった。

「読み手」が「絵札」の和歌を読み始めるや否や、競技者は目にも留まらぬ速さで、読まれた和歌と同じ「字札」を見つけて、はじき出す。

「競技かるた」は、年令、男女の区別なく楽しむことができる。



百人一首の絵札と字札



## 二節＝「近代の小説」

### [一・夏目 漱石]

小説家であり英文学者である「夏目漱石」は、日本の近代文学における国民的文豪だ。

作品は、「我輩は猫である」、「坊っちゃん」、「草枕」、「虞美人草」、「三四郎」、「それから」、「門」、「彼岸過迄」、「こころ」、「道草」、「明暗」、「行人」、「倫敦塔」など多数の小説や、「現代日本の開花」、「私の個人主義」などの評論がある。

処女作の「我輩は猫である」は、中学校の英語教師が飼っている「猫」が主人公だ。教師の家族や周囲の人々の表情やさまざまな出来事を「猫の目」を通して、擬人法で書いている。

人と社会を風刺的にとらえたユーモアあふれる物語だ。

同時に、「漱石」自身の人間観、社会観に基づいた鋭い文明批評でもある。

「漱石」の心の深層と豊饒な文学的才能が、自然に、かつ奔放に発揮されている。

「坊っちゃん」は、松山(愛媛県松山市)の中学校に赴任した“江戸っ子”の英語教師の正義感と楽天的な性格を、明るいユーモラスなタッチで書いたもの。

「漱石」自身の一年間の中学校教師の体験をもとにしたさまざまな登場人物が、「典型的な日本人」として描写されている。

「夏目漱石」は、文部省(当時)からの文学博士号を辞退した際、「これまでずっとただの夏目なにがし、で生きてきたし、これからはただの夏目なにがし、で生きていくから」と語った。

「堇程な 小さき人に 生まれたし」という「漱石」の俳句は、「生まれ変われるものなら、堇のような存在の人になりたい」という心情を吐露している。

堇の花言葉は「謙虚、純潔、誠実」。

また、「漱石」は「文展と芸術」の中で、「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終わるもの」と述べている。

### [略歴]

慶応3年(1867年)、現在の東京都新宿区に生まれた。本名は「夏目金之助」。

学生時代、千葉県を旅行した際の紀行漢詩文集を、郷里の松山市で静養中の学友「正岡子規」に送り、急速に親しくなった。

27歳で東京帝国大学(現在の東京大学)英文科を卒業して、その後、大学院へ。同時に、東京高等師範学校の英語教師になる。

29歳の4月、松山中学校の教諭として赴任。1年勤め、30歳の4月、第五高等学校(熊本県)教諭となり、結婚。この間、俳句や漢詩などを雑誌に発表。

34歳の1900年10月から2年3カ月、イギリスに留学した。

シェイクスピア研究家の個人授業を受け、文学論を執筆し、1903年1月に帰国した。

37歳の時、東京帝国大学英文科の初の日本人講師となり、英文学形式論などを教えた。しかし、留学中にかかった神経衰弱の再発に悩み続けた。

39歳の1905年(明治38年)1月、「吾輩は猫である」を正岡子規<sup>しゆさい</sup>主宰の俳句雑誌「ホトトギス」に発表。たちまち評判を呼んだ。

40歳の時、「坊っちゃん」を発表。

41歳の1907年(明治40年)4月、招かれて朝日新聞社に入社。「文芸の哲学的基礎」を27回にわたって朝日新聞に連載、その後、「虞美人草」、「三四郎」、「それから」、「門」、「彼岸過迄」、「道草」などの作品を同紙に発表した。

50歳になった1916年(大正5年)5月、胃潰瘍<sup>いはいよう</sup>や糖尿病<sup>とうにょうびよう</sup>などに苦しみながら、「明暗」の連載を始めたが、12月9日に死去。「明暗」は、「漱石」の死後も5日続いたが、未完のまま12月14日に188回で終わった。



## 『吾輩は猫である』の冒頭

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事だけは記憶して居る。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くと、それは書生という人間中で一番<sup>どうあく</sup>穢悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食らうという話である。しかし、その当時は何という考えもなかったから別段、恐ろしいとも思わなかった。ただ、彼の<sup>てのひら</sup>掌に載せられてスーと持ち上げられた時、何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが<sup>いわゆる</sup>所謂人間というものの見始めであろう。この時、妙なものだと思った感じが今でも残って居る。第一、毛をもって装飾されべき筈の顔がつるつるして、まるで<sup>やかん</sup>薬缶だ。その後、猫にも大分逢ったが、こんな片輪<sup>かたわ</sup>には一度も出くわした事がない。のみならず、顔の真ん中が余りに突起して居る。そうして、その穴の中から時々<sup>けむり</sup>ぷうぷうと煙を吹く。どうも<sup>む</sup>煙せばくて<sup>たばこ</sup>実に弱った。これが人間の飲む<sup>ようや</sup>煙草というものである事は漸くこの頃知った。

## 《坊ちゃん》の冒頭

親<sup>おや</sup>譲<sup>ゆず</sup>りの無<sup>む</sup>鉄<sup>てつ</sup>砲<sup>ぽう</sup>で小<sup>こ</sup>供<sup>づかい</sup>の時<sup>とき</sup>から損<sup>こ</sup>ばかりしている。小<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>る時<sup>とき</sup>分<sup>ぶん</sup>、学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>の二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>から飛<sup>と</sup>び降<sup>り</sup>りて、一<sup>いっ</sup>週<sup>しゅう</sup>間<sup>かん</sup>程<sup>ほど</sup>腰<sup>こし</sup>を抜<sup>ぬ</sup>かした事<sup>こと</sup>がある。な<sup>な</sup>ぜそ<sup>そ</sup>ん<sup>な</sup>な無<sup>む</sup>闇<sup>やみ</sup>をし<sup>し</sup>た<sup>と</sup>聞<sup>き</sup>く人<sup>ひと</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>か<sup>も</sup>も知<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ。別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>深<sup>ふか</sup>い理<sup>り</sup>由<sup>ゆう</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>い。新<sup>しん</sup>築<sup>ちく</sup>の二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>から首<sup>くび</sup>を出<sup>で</sup>して<sup>いて</sup>いた<sup>ら</sup>、同<sup>どう</sup>級<sup>きゅう</sup>生<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いっ</sup>人<sup>にん</sup>が冗<sup>じやう</sup>談<sup>だん</sup>に、い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>ら威<sup>い</sup>張<sup>ちやう</sup>つて<sup>も</sup>、そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>から飛<sup>と</sup>び降<sup>り</sup>りる事<sup>こと</sup>は出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ま<sup>い</sup>い。弱<sup>じやく</sup>虫<sup>ちゆう</sup>や<sup>や</sup>〜<sup>い</sup>と囃<sup>は</sup>した<sup>か</sup>ら<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>る。小<sup>こ</sup>使<sup>づかい</sup>に<sup>に</sup>負<sup>お</sup>ぶ<sup>さ</sup>つて<sup>て</sup>帰<sup>かえ</sup>つて<sup>て</sup>来<sup>き</sup>た<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>、お<sup>お</sup>や<sup>や</sup>じ<sup>じ</sup>が<sup>が</sup>大<sup>だい</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>眼<sup>め</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て、二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>位<sup>い</sup>から飛<sup>と</sup>び降<sup>り</sup>りて<sup>て</sup>腰<sup>こし</sup>を<sup>を</sup>抜<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>奴<sup>やつ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>か<sup>も</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>つた<sup>か</sup>ら、こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>次<sup>ぎ</sup>は<sup>は</sup>抜<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>さ<sup>さ</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>飛<sup>と</sup>んで<sup>で</sup>見<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>答<sup>こた</sup>え<sup>え</sup>た。

親<sup>おや</sup>類<sup>るい</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>に</sup>西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>製<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>ナ<sup>な</sup>イ<sup>い</sup>フ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>ら<sup>ら</sup>つて<sup>て</sup>綺<sup>き</sup>麗<sup>れい</sup>な<sup>な</sup>刃<sup>は</sup>を<sup>を</sup>日<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>ざ<sup>ざ</sup>し<sup>し</sup>て、友<sup>とも</sup>達<sup>だつ</sup>に<sup>に</sup>見<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>ら</sup>、一<sup>いっ</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup>光<sup>ひかり</sup>る<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>光<sup>ひかり</sup>る<sup>が</sup>切<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>つた。切<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>こと</sup>事<sup>こと</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>か<sup>も</sup>、何<sup>なん</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>切<sup>き</sup>つて<sup>て</sup>見<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>ると<sup>と</sup>受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>合<sup>あ</sup>つた。そ<sup>そ</sup>ん<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>指<sup>ゆび</sup>を<sup>を</sup>切<sup>き</sup>つて<sup>て</sup>見<sup>み</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>注<sup>ちゆう</sup>文<sup>ぶん</sup>した<sup>か</sup>ら、何<sup>なん</sup>だ<sup>だ</sup>指<sup>ゆび</sup>位<sup>ぐらい</sup>、こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>通<sup>つう</sup>り<sup>り</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>右<sup>みぎ</sup>の<sup>の</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おや</sup>指<sup>ゆび</sup>の<sup>の</sup>甲<sup>か</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>に<sup>に</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>込<sup>こ</sup>んだ。幸<sup>さい</sup>い、ナ<sup>な</sup>イ<sup>い</sup>フ<sup>ふ</sup>が<sup>が</sup>小<sup>こ</sup>さい<sup>い</sup>の<sup>の</sup>と、親<sup>おや</sup>指<sup>ゆび</sup>の<sup>の</sup>骨<sup>ほね</sup>が<sup>が</sup>堅<sup>かた</sup>か<sup>か</sup>つた<sup>た</sup>ので、今<sup>いま</sup>だ<sup>だ</sup>に<sup>に</sup>親<sup>おや</sup>指<sup>ゆび</sup>は<sup>は</sup>手<sup>て</sup>に<sup>に</sup>付<sup>つ</sup>いて<sup>いて</sup>る。し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し、傷<sup>きず</sup>痕<sup>あと</sup>は<sup>は</sup>死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>消<sup>け</sup>え<sup>え</sup>ぬ。



## [二・森 鷗外]

「森鷗外」は文<sup>ぶん</sup>久<sup>きゅう</sup>2<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>(1862<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>)、現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>の<sup>の</sup>島<sup>しま</sup>根<sup>ね</sup>県<sup>けん</sup>津<sup>つ</sup>和<sup>わ</sup>野<sup>の</sup>町<sup>ちやう</sup>の<sup>の</sup>医<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>の</sup>家<sup>け</sup>に<sup>に</sup>生<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>れた<sup>た</sup>。

本<sup>ほん</sup>名<sup>めい</sup>は「森<sup>りん</sup>林<sup>たろう</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>ろう</sup>」。文<sup>ぶん</sup>芸<sup>ぎ</sup>全<sup>ぜん</sup>般<sup>ぱん</sup>に<sup>に</sup>造<sup>ぞう</sup>詣<sup>ぎ</sup>が<sup>が</sup>深<sup>ふか</sup>く、洋<sup>やう</sup>学<sup>がく</sup>・漢<sup>かん</sup>学<sup>がく</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>か<sup>か</sup>医<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>の<sup>の</sup>知<sup>ち</sup>識<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>つた<sup>た</sup>教<sup>きやう</sup>養<sup>やう</sup>人<sup>にん</sup>だ<sup>だ</sup>つた。

歴<sup>れき</sup>史<sup>し</sup>小<sup>せう</sup>説<sup>せつ</sup>だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>で<sup>で</sup>な<sup>な</sup>く、翻<sup>はん</sup>訳<sup>やく</sup>や<sup>や</sup>評<sup>へう</sup>論<sup>ろん</sup>、・創<sup>そう</sup>作<sup>さく</sup>・批<sup>ひ</sup>評<sup>へう</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>手<sup>て</sup>が<sup>が</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>文<sup>ぶん</sup>壇<sup>だん</sup>の<sup>の</sup>重<sup>じゅう</sup>鎮<sup>ちん</sup>で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>る。大<sup>だい</sup>正<sup>しやう</sup>11<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>(1922<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>)、60<sup>ろくじゅう</sup>歳<sup>さい</sup>で<sup>で</sup>亡<sup>な</sup>く<sup>な</sup>つた。

19<sup>じゅう</sup>歳<sup>さい</sup>で<sup>で</sup>東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>医<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>部<sup>ぶ</sup>を<sup>を</sup>卒<sup>そつ</sup>業<sup>ぎやう</sup>、陸<sup>りく</sup>軍<sup>ぐん</sup>軍<sup>ぐん</sup>医<sup>い</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>り、明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>17<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>(1884<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>)か<sup>か</sup>ら<sup>に</sup>明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>21<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>(1888<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>)ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>の<sup>の</sup>足<sup>あし</sup>掛<sup>かけ</sup>け5<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>、医<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>研<sup>けん</sup>究<sup>きゅう</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>、ド<sup>ど</sup>イ<sup>い</sup>ツ<sup>つ</sup>に<sup>に</sup>留<sup>りゅう</sup>学<sup>がく</sup>し<sup>した</sup>た。こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>体<sup>てい</sup>験<sup>げん</sup>が、処<sup>まい</sup>女<sup>にょ</sup>作<sup>さく</sup>「舞<sup>ひめ</sup>姫<sup>ぎ</sup>」の<sup>の</sup>題<sup>だい</sup>材<sup>ざい</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>つて<sup>いて</sup>る。

留<sup>りゅう</sup>学<sup>がく</sup>後<sup>ご</sup>約<sup>やく</sup>5<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>、医<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>誌<sup>し</sup>の<sup>の</sup>発<sup>はつ</sup>行<sup>ぎやう</sup>に<sup>に</sup>携<sup>たずさ</sup>わ<sup>わ</sup>つた。

29<sup>じゅう</sup>歳<sup>さい</sup>で<sup>で</sup>医<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>博<sup>はく</sup>士<sup>し</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>つた。明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>40<sup>しゅう</sup>年<sup>ねん</sup>(1907<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>)、45<sup>しゅう</sup>歳<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>、軍<sup>ぐん</sup>医<sup>い</sup>総<sup>そう</sup>監<sup>かん</sup>に<sup>に</sup>任<sup>にん</sup>ぜ<sup>ぜ</sup>ら<sup>ら</sup>れ、陸<sup>りく</sup>軍<sup>ぐん</sup>省<sup>しやう</sup>医<sup>い</sup>務<sup>む</sup>局<sup>きよく</sup>長<sup>ちやう</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>る。

そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>10<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>は、創<sup>そう</sup>作<sup>さく</sup>、評<sup>へう</sup>論<sup>ろん</sup>、翻<sup>はん</sup>訳<sup>やく</sup>、随<sup>ずい</sup>筆<sup>ひつ</sup>、研<sup>けん</sup>究<sup>きゅう</sup>、考<sup>かう</sup>証<sup>しやう</sup>と<sup>と</sup>多<sup>た</sup>方<sup>はう</sup>面<sup>めん</sup>に<sup>に</sup>目<sup>め</sup>ざ<sup>ざ</sup>ま<sup>ま</sup>しい<sup>い</sup>業<sup>ぎやう</sup>績<sup>せき</sup>を<sup>を</sup>残<sup>のこ</sup>し、「鷗<sup>おう</sup>外<sup>がい</sup>」の<sup>の</sup>「豊<sup>ほう</sup>熟<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>」と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>る。

「う<sup>き</sup>た<sup>が</sup>な<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>記<sup>き</sup>」、「雁<sup>がん</sup>」、「山<sup>さん</sup>椒<sup>しやう</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふう</sup>」、「阿<sup>あ</sup>部<sup>べ</sup>一<sup>いち</sup>族<sup>ぞく</sup>」、「高<sup>たか</sup>瀬<sup>せ</sup>舟<sup>ふね</sup>」な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>作<sup>さく</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る。

ま<sup>ま</sup>た、ド<sup>ど</sup>イ<sup>い</sup>ツ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>詩<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>・ゲ<sup>げ</sup>ー<sup>え</sup>テ<sup>て</sup>の<sup>の</sup>劇<sup>げき</sup>詩<sup>し</sup>「フ<sup>ふ</sup>ア<sup>あ</sup>ウ<sup>う</sup>ス<sup>す</sup>ト」な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>を<sup>を</sup>翻<sup>はん</sup>訳<sup>やく</sup>し、デ<sup>で</sup>ン<sup>でん</sup>マ<sup>ま</sup>ー<sup>え</sup>ク<sup>く</sup>の<sup>の</sup>小<sup>せう</sup>説<sup>せつ</sup>家<sup>か</sup>・ア<sup>あ</sup>ン<sup>あん</sup>デ<sup>で</sup>ル<sup>る</sup>セ<sup>せ</sup>ン<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>長<sup>ちやう</sup>編<sup>へん</sup>小<sup>せう</sup>説<sup>せつ</sup>「即<sup>そつ</sup>興<sup>きやう</sup>詩<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>」の<sup>の</sup>翻<sup>はん</sup>訳<sup>やく</sup>は、翻<sup>はん</sup>訳<sup>やく</sup>文<sup>ぶん</sup>学<sup>がく</sup>の<sup>の</sup>傑<sup>けつ</sup>作<sup>さく</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>いて</sup>る。

## 《山椒大夫》の冒頭

越後（注）の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群れが歩いている。

母は三十歳をこえたばかりの女で、二人の子供を連れている。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞（注）を、「もうじきにお宿にお着きなさいます」と言ってお励まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足をひきずるようにして歩いているが、それでも気が勝っていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、おりおり思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。

近い道を物詣りにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠や杖やら、かいがいしいでたちをしているのが、誰の目にも珍しく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断えたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋日和によく乾いて、しかも粘土がまじっているために、よく固まっていて、海のそばのように、踝（注）を埋めて人を悩ますことはない。

藁葺きの家が何軒も立ち並んだ一構えが柵の林に囲まれて、それに夕日がかつと差している所を通りかかった。

「まあ、あの美しい紅葉をごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね」

姉娘が突然、弟を顧みて言った。「早くおとう様のいらっしゃる所へゆきたいわね」

《注・越後＝現在の新潟県。

同胞＝兄弟姉妹。「どうほう」と読む時は、「同じ国民」のこと。

踝＝足首の関節の両側の突起したところ》



### [三・島崎 藤村]

「島崎藤村」は明治5年(1872年)、長野県木曾郡山口村馬籠(現在、岐阜県中津川市)の本陣・問屋・庄屋を兼ねた旧家に生まれた。本名は「島崎春樹」。

日本が近代化の道歩んだ明治、大正、昭和の三代にわたって、自然主義文学の代表作家として活躍。昭和18年(1943年)に71歳で亡くなった。

「島崎藤村」は明治学院を卒業後、「女学雑誌」に翻訳を寄稿したり、明治女学校の教師をしたりして、21歳の時、「文学界」の創刊に加わり、自分の感情や情緒を表現する「抒情詩人」としてスタートを切った。

作品は、詩集「若菜集」、「夏草」、「落梅集」、紀行感想集「千曲川のスケッチ」のほか、日本の歴史文学の屈指の傑作と言われる小説「夜明け前」、日本の自然主義文学運動の起点と評される「破戒」など、広範なジャンルに及んでいる。

「藤村」の詩は、日本の近代詩の出発点となった。

合本「藤村詩抄」の序で、「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ」とし、自らの詩の本質について、「詩歌は静かなるところにて思ひ起こしたる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦闘の告白なる」と表現している。

現実の苦闘から一歩退いて静かな抒情としてまとめるのが「藤村」の詩法だ。

文芸評論家・吉田精一<sup>よしだ せいいち</sup>氏は、岩波文庫「藤村詩抄」で、

「用語は日常ふつうのことばに近く、ワーズワース(イギリスの詩人)の『意を新しく、  
詞<sup>ことば</sup>を平易にする』という方向を追って成功した」、

「第一の功労を感情開放の先駆<sup>せんく</sup>にありとし、第二の功労を、平俗な国語を詩語として  
りっぱに更生させた点にあるとした佐藤春夫<sup>さとうはるお</sup>(詩人・小説家)の意見は肯定すべきだ」  
「藤村の詩がその後の詩および詩人にどれほどの感化をあたえ、またどれほど後人の  
感情、情緒をうるおしたかは改めていわない。影響の広さ大きさという一点では藤  
村をしのぐ人はいない」

と書いた。

「藤村」の小説はそれほど多くない。

「夜明け前」は、「藤村」が58歳の昭和4年(1929年)4月から年4回、足掛け7年、「中央公論」に連載した長編小説(400字詰め原稿用紙・2,500枚)である。

主人公・青山半蔵<sup>あおやまはんぞう</sup>のモデルは、父の正樹<sup>まさき</sup>。

明治維新前後の動乱期を主題としながら、明治から大正、昭和にかけての日本の近代化の過程が内包する様々な矛盾を問いかけている。事柄をありのままに綴る叙事詩的な壮大な世界が展開されている。

「破戒」の主人公は、未解放部落出身の青年教師である瀬川丑松<sup>せがわうしまつ</sup>。差別問題を主題とする社会小説としての側面と同時に、出生<sup>しゅっしょう</sup>の秘密を負い、自我確立のために苦悩する青年の心理描写の面においても、高い評価を得ている。

## 《夜明け前》の冒頭

木曾路<sup>きそじ</sup>はすべて山の中である。あるところは岨<sup>そわ</sup>(注)づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

東ざかいの桜沢<sup>さくらざわ</sup>から、西の十曲峠<sup>じゅっきょくとうげ</sup>まで、木曾十一宿<sup>きゅういっしゅく</sup>はこの街道に添うて、二十二里余にわたる長い溪谷の間に散在していた。道路の位置も幾たびか改まったもので、古道はいつのまにか深い山間に埋もれた。名高い<sup>かけはし</sup>棧<sup>つた</sup>も、鳶<sup>と</sup>のかずらを頼みにしたような危ない場処ではなくなって、徳川時代の末にはすでに渡る<sup>はし</sup>ことのできる橋であった。新規に新規に、とできた道はだんだん谷の下の方の位置へと降<sup>くだ</sup>って来た。道の狭いところには、木を伐<sup>き</sup>って並べ、藤づるでからめ、それで街道の狭いのを補った。長い間にこの木曾路に起

こって来た変化は、いくつcaずつでも険阻な山坂の多いところを歩きよくした。そのかわり、大雨ごとにやって来る河水の氾濫が旅行を困難にする。そのたびに旅人は最寄り最寄りの宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめずらしくない。

この街道の変遷は幾世紀にわたる封建時代の発達をも、その制度組織の用心深さをも語っていた。鉄砲を改め、女を改めるほど旅行者の取り締まりを嚴重にした時代に、これほどよい要害の地勢もないからである。

この溪谷の最も深いところには木曾福島の関所も隠れていた。

《注・岨＝険しい所》

## [四・村上 春樹]

国の内外で高い評価を受ける現代の人気作家「村上春樹」は1949年1月、京都市生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒。ジャズ喫茶の経営を経て、1979年に「風の歌を聴け」で群像新人文学賞を受賞、文壇にデビューした。

2009年5月に上巻が出版された長編小説「1Q84」(新潮社)が発売直後から異例の売れ行きを見せ、2010年4月にかけて出版された上・中・下の3巻合計で380万部を超える超ベストセラーに。

作品は、長短編小説だけでなく、ノンフィクション、随筆、アメリカ文学作品の翻訳など多岐にわたる。

代表作の「ノルウェイの森」をはじめ、多くの作品が世界的に注目を集め、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシア、中国、韓国など、50以上の言語で翻訳されている。

特に、中国で「絶対村上(ばっちり村上)」、台湾で「非常村上(すごく村上)」という言葉が流行するほど、アジアでの人気が高い。

「1Q84」は、「月が二つあるパラレルワールド(二つの物事が並行している世界)に紛れ込む“近過去”の物語」。

中国、ドイツなどでも翻訳され、2011年11月に米国で英語版が出版され話題を集めた。米誌「ニューヨーク・タイム・マガジン」は「人間の脳がやっと耐えられる数々の不思議な展開に驚かされる」と評した。

「村上」はインタビューで「1981年の短編『四月のある晴れた朝に100%の女の子に出会うことについて』をふくらませたもの。男の子が女の子と出会う。二人は別れ、お互いを捜す。単純な物語。長くただけです」と話している。

アメリカの新聞評も、「スリラーとしても、恋愛小説としても楽しめる」、「並外れて野心的」と好意的。

(この項は、2011年10月27日付「朝日新聞」から)。



1987年に発表した「ノルウェイの森」は2008年時点で、単行本の発行部数が上巻・下巻合わせて450万部に達した。2009年8月には、単行本と文庫本を合わせた発行部数が1,000万部を超えた。

「ノルウェイの森」は、《1987年、37歳になった主人公の「僕」がハンブルグ空港に着陸する直前の飛行機の中でビートルズの「ノルウェイの森」を耳にして、自殺した恋人「直子」を思い出し、自らの回想の中に探しに出かける》、という内容。

文芸評論家の清水良典氏は朝日新書「村上春樹はくせになる」の中で、「村上春樹の長編小説には、二つの系列がある」と次のように書いている。

《一つは「羊をめぐる冒険」以降に確立されたアドベンチャー物語の系列。

「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、「ダンス・ダンス・ダンス」、

「ねじ巻きクロニクル」、そして「海辺のカフカ」が含まれる。

もう一つは、失われた恋を回想するセンチメンタル・ロマンスの系統。

作者自身は「ノルウェイの森」を「100%の恋愛小説」と言ったが、まさにこの作品によって、失われた恋の記憶を回想し心の痛みを反芻するセンチメンタル・ロマンスのスタイルが確立されたといっている。

「国境の南、太陽の西」、「スプートニクの恋人」がその系統に連なる》

「村上春樹」は毎年、ノーベル文学賞の有力候補として注目されている。

2006年には、「フランツ・カフカ賞」をアジア圏で初めて受賞。この賞は「自らの出身国や国民性、属する文化などにとらわれない読み手たちに向けて書こうとする現代作家の、芸術的に特に優れた文学作品を評価する」ために、2001年に創設されたチェコの文学賞。2004年、2005年に受賞したオーストリアの女性作家、イギリスの劇作家はいずれも同年にノーベル文学賞を受賞した。

アメリカのプリンストン大学は2008年6月、「村上春樹」に名誉学位(文学博士号)を贈った。「不可思議なものと日常的なものを併置し、現代生活の中心に存在する孤独と不確実性をすくい上げている」というのが理由。

村上作品は「文章は平易で分かりやすいが、作品のストーリーは難解だ」としばしば指摘される。このことについて、「村上」は「物語を楽しむこと」と、「心に訴える文章」の重要性を強調した。

「村上」の最新小説は、2013年4月発行の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』。20歳になる直前、友人たちに一方的に絶縁された「多崎つくると」が主人公。36歳になって、仲間を訪ねる旅に……。発行部数は発売一週間で「100万部」を突破した。

2014年4月に、6年ぶりの短編集「女のいない男たち」(全6編)を出版。

2015年には、紀行文集『ラオスにいったい何があるというんですか?』を出版した。

また、「村上春樹」は随筆「やがて哀しき外国語」の中で、「外国人に外国語で自分の気持ちを正確に伝えるコツ」について、次のように書いている。

- ① 自分が何を言いたいのかということをまず自分がはっきり把握すること。そのポイントを、なるべく早い機会にまず短い言葉で明確にすること
- ② 自分がきちんと理解しているシンプルな言葉で語ること。難しい言葉、カッコいい言葉、思わせぶりの言葉は不要である。



# 三節 = 「俳句」、「詩」、「短歌」

## [一・松尾 芭蕉(俳人)]

「松尾芭蕉」は俳諧の最高峰として、国民に広く愛されている。

古池や 蛙 飛び込む 水の音

閑かさや 岩にしみいる 蟬の声

などの俳句や、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」で始まる俳諧紀行文「奥の細道」はあまりにも有名だ。

「芭蕉」は寛永21年(1644年)、伊賀国上野(現在の三重県伊賀市)に生まれた。

元禄7年(1694年)、大阪御堂筋の花屋仁右衛門方で客死、享年51歳だった。

「芭蕉」の発病から臨終までの様子は、弟子の榎本其角の「芭蕉翁終焉記」、同じく弟子の各務支考編の「笈日記」に詳しく記されている。

旅に病んで 夢は枯れ野を かけ廻る

は、辞世の句として有名。

今から約327年前の元禄2年(1689年)5月、46歳の「松尾芭蕉」が弟子の河合曾良(当時41歳)とともに、現在の東京都江東区深川を出発し、埼玉県、栃木県、福島県、宮城県、岩手県、山形県、秋田県、新潟県、富山県、石川県、福井県、滋賀県を巡って、約5カ月後の10月に岐阜県大垣に到着するまで、約2,400キロメートルの行程を旅した紀行文が「奥の細道」だ。「芭蕉」は5年の歳月を費やして、俳文といわれる散文詩的な文章の間に51の俳句を配した革新的な紀行文学を完成させた。

このことから、「芭蕉」は「漂泊の旅人」と呼ばれている。



「芭蕉」の最初の句は、「宗房」の号で19歳(1662年)の時の次の句だ。

## 春やこし 年や行けん 小晦日<sup>こつごもり</sup>

以来、51歳で死を迎えるまでに「芭蕉」が詠んだ俳句は928句。

同じ江戸時代の俳人、「与謝蕪村<sup>よきぶそん</sup>」の2,782句、「小林一茶<sup>こばやしいつき</sup>」の2万余句に比べると、極端に少ない。

蕉風<sup>しょうふう</sup>と称される「芭蕉」独自の俳諧の出発点は、貞享<sup>じょうきやう</sup>元年(1684年)、41歳の時の帰郷の旅立ちだった。

亡くなるまでの11年間に業績が集中している。

この旅立ちは、一般に「野ざらしの旅」と呼ばれ、「野ざらし紀行<sup>のきこう</sup>」、「冬<sup>ふゆ</sup>の日」という作品を生んだ。この時の句が次の句だ。

## 野ざらしを 心に風の しむ身哉<sup>みかな</sup>

「芭蕉」の20代は不明な点が多く、句も少ない。

「松尾芭蕉」は、故郷の上野で2歳年長の「藤堂良忠<sup>とうどうよしただ</sup>」に仕えたことが契機となり、俳諧と出遭う。

「藤堂良忠」は俳号を「蟬吟<sup>せんぎん</sup>」といい、「北村季吟<sup>きたむら きぎん</sup>」(国学者。俳人)の門下生。「北村季吟」の師は、貞門風<sup>ていもんふう</sup>俳諧の祖である江戸時代初期の「松永貞徳<sup>まつながていとく</sup>」(国学者。俳人)。

貞門風俳諧は、俗語や漢語などを用いて言語上の遊びを主とする俳風で知られ、芭蕉の俳諧の出発点となった。

「芭蕉」は「藤堂良忠」の没(1666年)後、無断で故郷を離れ、京に上り、禅宗の寺院などで修行を重ねた。

この頃の心の内は、

## 暫く学んで 愚を曉ん事を 思へと<sup>しばら まな ぐ さとら こと おも</sup>

(少しの間、学問を学んで、自分の愚<sup>おろ</sup>かさを知ろうと思ったが)

という記述や、「幻住庵記<sup>げんじゅうあんのき</sup>」の

## 一たびは 仏離祖室の扉に 入らむとせしも<sup>ひと ぶつり そしつ とびら い</sup>

(一度は俗世間を離れ信仰や仏道に入ろうとはしたが)

という「芭蕉」自身の述懐から知ることができる。

同時に、「芭蕉」はこの時期は、

## 進んで人にかたむ事をほこり

(進んで人に勝つことを自慢して)

## 身を立てむ事を願ったり

(立身出世を願ったり)

## ある時は、仕官懸命の地をうらやみ<sup>し かんけんめい</sup>

(ある時は、主君に仕え俸禄<sup>ほうろく</sup>をもらうことに心引かれた)

という心境にもなったらしい。

恩人、「藤堂良忠」の若き突然の死による失意、出奔<sup>しゅつぽん</sup>、放浪、試行錯誤という若き日々の不安と苦悩など、「芭蕉」の内面を垣間見ることができる。

自分の行く道を定めかねたのも、「芭蕉」の心の中に、

風羅坊<sup>ふうらぼう</sup>と言ふ。誠にうすものの 風に破れやすからん

(さまよっている風来坊と言う。本当に薄いもので、

風にあったらすぐ破れてしまいそうな)

という不安があったからだ。

そして、「芭蕉」自身、「狂句<sup>きやうく</sup>を好むこと久しき」という性格から、

つひに生涯のはかりごととなす

(ついに一生涯の仕事とする)

決意を固めたのである。

寛文<sup>かんぶん</sup>12年(1672年)、同好の人々と語らい、三十番の発句<sup>ほつく</sup>あわせをした。

それに、「芭蕉」が判詞<sup>はんじ</sup>(句の優劣を評した詞<sup>ことば</sup>)を加えた「貝おほひ」を故郷・上野の天満天神社へ奉納し、俳諧の宗匠<sup>そうしやう</sup>として世に出ることを願って江戸へ下った。29歳だった。

その覚悟とは程遠く、芭蕉にとって現実は厳しく、思うに任せぬ日が続いた。しかし、精進努力の結果が次第に世に受け入れられるようになった。

枯枝<sup>かれえだ</sup>に 烏のとまりたるや 秋の暮

あるいは、

野分<sup>のわき</sup>して 鹽<sup>たらい</sup>に雨を 聞く夜哉<sup>かな</sup>

などの名吟を発表するにつれ、俳壇での地位を確固たるものにしていった。

天和<sup>てんな</sup>3年(1683年)、漢詩的な表現などに特色を見せる其角<sup>きかく</sup>による「虚栗<sup>みなしぐり</sup>」が上梓<sup>じやうし</sup>されるに及んで、蕉門派(芭蕉の一門)は江戸俳壇の主流の観を呈するまでになった。

「虚栗」の俳句について、「芭蕉」は、李白<sup>りはく</sup>、杜甫<sup>とほ</sup>、寒山<sup>かんざん</sup>、西行<sup>さいぎやう</sup>、白楽天<sup>はくらくてん</sup>らの詩趣<sup>そな</sup>を具えていることを誉めている。

「奥の細道」の冒頭「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」が、「李白」の「春夜宴桃李園序(しゅんや とうりのそのに えんするのじょ)」を踏まえており、続く「古人も多く旅に死せるあり」の「古人」を考え合わせると、「李白」以下の人々が、「芭蕉」にとって敬慕して止まなかった和漢の詩人であったことが分かる。

しかし、この「虚栗」調も芭蕉俳諧が更なる新風へ展開する過渡的なもので、芭蕉は絶えず「新<sup>あた</sup>しみ」を追求していた。

そのことは、弟子の「服部土芳<sup>はっとりどほう</sup>」の

亡師<sup>ぼうし</sup>常に願いにさせ給ふも 新しみの句<sup>なり</sup>ひ也

という証言からも明らかで、「芭蕉」自らが「古人の跡を求めず、古人の求めるところを求めよ」(許六離別<sup>きよりくり べつのことば</sup>詞)と書いている。

「去来抄<sup>きょらいしょう</sup>」で、

かりにも古人の涎<sup>よだれ</sup>を なむる事なかれ

(たとえ一時的にもせよ、先人のよだれをなめるようなことをしてはならない)

と、教えさとした。

(注・「去来抄」は、弟子の「向井去来<sup>むかい きょらい</sup>」が「松尾芭蕉」からの伝聞<sup>でんぶん</sup>、蕉門での論議、俳

諧の心構えなどをまとめた俳諧論書)

「芭蕉」は、自分の俳諧を「夏炉冬扇」にたとえ戯画化したが、「芭蕉」の理念について、弟子の「服部土芳」は「万代不易・一時の流行」と説明した。

「不易流行・一時の流行」は、永遠性と新風は根本において一つだ。共に「風雅の誠」という意味で、「芭蕉」の俳諧用語となっている。

「貞門風」から「蕉風」への変化は、「新しきは俳諧の花」という「新化を希求」した結果だった。

「虚栗」を脱却して「蕉風」への展開を示した「冬の日」へ。

「森川許六」が「俳諧の古今集也」と称賛した「蕉風」の到達点である「猿蓑」へ。さらに

梅が香に のつと日の出る 山路かな

で名高い「かるみ」の風調を表した最晩年の「炭俵」への変化も、「新化への希求」の所産だった。

和歌・連歌の伝統を継承しながら、徒にそれを墨守するのではなく、常に「誠をせめ・こらす」姿勢を持ち、新化を志した「松尾芭蕉」だからこそ、その作品が普遍性を有し、現代に生き続けるのだ。

## 【俳句の基礎知識】

### ◇ 世界の最短詩

「俳句」は、森羅万象を「5・7・5の17音」で綴る世界で最も短い詩だ。

日本人は万葉の昔から「文章や手紙の最後に、思いを託した和歌（短歌）を添える」習慣があった。この歌を中心に編集されたのが「万葉集」や「古今和歌集」、「新古今和歌集」などだ。

そして、室町時代(1392年～1573年)になって、複数の人が「短歌」の「上の句(5・7・5)」と「下の句(7・7)」を互いに詠み続ける「連歌」が生まれた。

例えば、

「雪ながら 山もとかすむ 夕べかな(宗祇)→行く水遠く 梅にほう里(肖柏)→  
川風に 一むら柳 春見えて(宗長)→  
舟さす音も しろきあけがた(宗祇)…」というのが連歌だ。

江戸時代になると、この「連歌」の初句の「5・7・5」が独立し、「俳諧(俳句)」として発展した。その俳祖が「松尾芭蕉」で、「与謝蕪村」や「小林一茶」らが出現する。

そして、「俳句」は上層の人々が詠む「短歌」と異なり、庶民の娯楽として流行した。

明治時代に入ると「正岡子規」、さらに大正、昭和になると「高浜虚子」らによって一層庶民の間に流行した。



日本人は、盃の中に映る月を見て感動するように、あらゆる場面で、小さなものに心をひかれる。そして、自然や人間の様々な心情を「5・7・5」という「17音の小さな世界」に歌い込む。

## ◇ 五・七・五のリズム

日本人は偶数ではなく、奇数を好む。

スポーツなどの応援は「3・3・7」拍子と、短く「音」を切ることによって調子を高めていく。子供の成長を祈願する「七・五・三」の祝い、結婚式の神事で行なわれる「三・三・九度」（三つの杯で、三度ずつ合計九回、杯の酒を口につける）も同じ。

「俳句」も、上の「<sup>かみ</sup>5」と中の「<sup>なか</sup>7」、さらに、中の「7」と下の「<sup>しも</sup>5」の音律がうまく響き合った時に、森羅万象の美的世界が深まる。

「俳句」を作る心構えについて、「芭蕉」は「言葉は控えめに、余分な言葉はなるべく切り捨てるように」と書いている。室町時代の「能」の大家「世阿弥<sup>ぜあみ</sup>」が「秘すれば花なり」、「怒れるときは足音を盗むべし」と表現したのも同じ趣旨だ。



## [二・宮沢<sup>みやざわ</sup> 賢治<sup>けんじ</sup> (詩人、童話作家)]

岩手県出身の詩人「宮沢賢治」の詩「<sup>あめ</sup>雨ニモマケズ」は、日本人に最も広く親しまれている詩だ。

2011年3月の「東日本大震災」に打ちのめされた多くの被災者に元気と勇気を与え、心の支えとなった。

### [雨ニモマケズ]

雨にも負けず  
風にも負けず  
雪にも夏の暑さにもまけぬ  
丈夫なカラダをもち  
欲はなく  
決して怒らず  
いつも静かに笑っている  
一日に<sup>げんまい</sup>玄米四合と  
味噌と少しの野菜を食べ  
あらゆることを  
自分を<sup>かんじょう</sup>勘定に 入れずに  
良く<sup>みき</sup>見聞きし わかり  
そして 忘れず  
野原の松の林の蔭の  
小さな<sup>かや</sup>萱ぶきの小屋にいて  
東に 病気の子供あれば  
行って看病してやり  
西に疲れた母あれば  
行ってその稲の束を負い  
南に死にそうな人あれば  
行って 恐がらなくてもいい と言い  
北にけんかや <sup>そしょう</sup>訴訟があれば  
つまらないからやめろ と言い  
日照りのときは 涙を流し  
寒さの夏は オロオロ歩き  
みんなに デクノボー と呼ばれ  
ほめられもせず  
苦にもされず  
そういうものに

わたしはなりたい

《注・デクノボー＝役に立たない人》

＜原文はカタカナと旧字体。ひらがなの現代仮名遣いと当用漢字で表記＞

2011年3月29日に行われた岩手県<sup>おおつちちょう</sup>大槌町の小学校の卒業式で、校長が「雨ニモマケズ」を朗読。「困難な今こそ、賢治の詩を胸に強い気持ちを持ってほしい」と子供たちを激励した。

卒業生の女子は「賢治はつらい状況を乗り越えた人。今の私の状況と、賢治の『雨ニモマケズ』は合っていると思う。大変だけど頑張りたい」と話した。

宮沢賢治記念館(岩手県<sup>はなまきし</sup>花巻市)の牛崎<sup>うしざきとしや</sup>敏哉・副館長は「詩には、賢治自身が体感していた悲しみや苦しみが集約されている。心の支えや癒やしとして、賢治の詩が人々の心に根付いていたのでしょう」と話している。

「宮沢賢治」は詩人、童話作家であると同時に、農業研究家、農村指導者だった。

明治29年(1896年)、現在の岩手県花巻市に生まれた。農民に対する深い愛情を持ち続け、昭和8年(1933年)、38歳で亡くなった。「土の詩人」と呼ばれる。

作品はほかに、「<sup>こいわいのうじょう</sup>小岩井農場」、「はるかな作業」などの詩や、「<sup>ぎんがてつどう</sup>銀河鉄道の夜」、「風の又<sup>また</sup>三郎<sup>さぶろう</sup>」、「注文の多い料理店」などの童話・短編小説がある。

「宮沢賢治」は、盛岡高等農林学校で農芸化学を専攻し、農学校の教諭となる。

中学時代に短歌を始め、やがて詩や童話に移る。

生前に刊行されたのは、詩集「<sup>はるしゅら</sup>春と修羅」と「注文の多い料理店」だけ。

「宮沢賢治」は擬音語(擬声語)・擬態語を最も多く用いた詩人と言われる。

「どしどしどしどし燃えています」、「キンキン光る」、「ふくふくしてあたたか」、「うるうるうるると飛び」、「もにゃもにゃって言って」など。

「宮沢賢治」は愛する故郷「岩手県」を、ドリームランドとしての「イーハトーブ」と名付けた。賢治の心象(心の中の世界)として描かれ、「すべてが可能になり、自然と人間が共生する世界」と捉えた。

「宮沢賢治」に対する評価は年々高まっている。

「賢治」生誕百年の2006年(平成18年)8月には、岩手県花巻市で「宮沢賢治生誕110年記念国際研究大会」が開かれた。「世界の中のイーハトーブ」、「賢治さんの想像力ときたら、大したもんだ!」、「宮沢賢治ー驚異の想像力・その源泉と多様性」などをテーマに、日本、フランス、アメリカ、中国、韓国、ロシア、インド、ポーランド、ポルトガルなど9カ国の研究者約20人が、記念講演、シンポジウム、研究発表を、日本語で行った。

### [三・石川 啄木(歌人)]

「石川啄木」は明治 19 年(1886 年)、現在の岩手県玉山村<sup>たまやまむら</sup>で生まれた。翌年、渋民村<sup>しぶたみむら</sup>(現在、盛岡市<sup>もりおかし</sup>玉山区渋民)に移り、幼少年期を過ごした。

17 歳で上京するが、生活は苦しく病気になる、4 カ月で帰郷。

18 歳の時、5 編の詩が文芸雑誌「明<sup>みやうじやう</sup>星」に掲載され、詩人として注目を浴びた。

19 歳で再度上京するが、21 歳で帰郷。母校・渋民小学校の代用教員となる。

しかし、1 年後に北海道に渡り、函館<sup>はこだて</sup>、札幌<sup>さっぽろ</sup>、小樽<sup>おたる</sup>、釧路<sup>くしろ</sup>を転々としたが、生活に満足できず、23 歳でまた上京。苦しい中で、歌を作ることが多くなった。

24 歳の時、朝日新聞社に校正係として就職。25 歳の 9 月、朝日新聞の歌壇の選者になった。生活は依然苦しく、26 歳の時、慢性腹膜炎で入院し、病状は一進一退を繰り返す。明治 45 年(1912 年)の元日の日記に「またしても苦しい一年を繰り返さねばならぬかと思うと、今まで死なずにいたのを泣きたくもあった」と書いた。

啄木はその年の 3 月、27 歳の若さで世を去った。

代表的な歌集は「一握<sup>いちあく</sup>の砂<sup>すな</sup>」と「悲しき玩具<sup>かながんぐ</sup>」。二つの歌集の歌は全部で 745 首。

「石川啄木」は、「一利己主義者と友人との対話」の中で、自分の歌について、次のように述べている。

「一生に二度とは帰って来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃してやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌といふ詩形を持ってるといふことは、我々日本人の少ししか持たない幸福の一つだよ。おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何より可愛いから歌を作る」。



協力：石川啄木記念館（盛岡市）

## 《石川啄木の代表的な歌》

- ・ たはむれに 母を背負ひて そのあまり <sup>かる</sup>軽きに泣きて 三步あゆまず
- ・ 東海の 小島の磯の 白砂に われ泣きぬれて <sup>かに</sup>蟹とたはむる
- ・ やはらかに <sup>やなぎあお</sup>柳 青める <sup>きたかみ</sup>北上の 岸边目に見ゆ 泣けとごとくに
- ・ かにかくに 渋民村は 恋しかり おもいでの山 おもいでの川
- ・ ふるさとの 山に向ひて 言ふことなし ふるさとの山は ありがたきかな
- ・ いのちなき 砂のかなしさよ さらさらと 握れば指の あひだより落つ
- ・ <sup>だい</sup>大といふ 字を百あまり 砂に書き 死ぬことをやめて 帰りに来れり
- ・ 石をもて 追はるるごとく ふるさとを 出でしかなしみ 消ゆる時なし
- ・ 函館の <sup>あおやぎちょう</sup>青柳町こそ かなしけれ 友の恋歌 矢ぐるまの花
- ・ 友がみな われよりえらく 見ゆる日よ 花を買ひ来て 妻としたしむ
- ・ はたらけど はたらけど <sup>なお</sup>猶 わが生活 楽にならざり ちっと手を見る

## 四節＝「昔話」<sup>むかし ばなし</sup>

日本の各地に、人々の間に「口づて」で伝えられている「昔話」がある。

「むかし、むかし」、「あるところに」、「おじいさんとおばあさんがいました、」という書き出しが多く、具体的な時代や場所や人の名前などは分からないものがほとんどだ。

親が、子どもを寝かせ付ける時などに、聞かせることが多く、日本人の間に広く語り継がれている。子どもが、読んで楽しく、人として大事なことを学びながら、「大切な心」を<sup>はぐく</sup>育んでいく、という教訓的な意味が込められている「昔話」が多い。

子どもたちに最も知られている四つの「昔話」を紹介する。

・・・・・・・・・・・・・・・・

### [一・「鶴<sup>つる</sup>の恩返<sup>おんがえ</sup>し」]

昔々、やさしくて正直者ですが、とても貧乏な「おじいさん」と「おばあさん」がおりました。

ある寒い日のこと、おじいさんは鉄砲をかついで山へ猟に出かけました。

ところが、いつの間にか雪がちらちらと舞い落ちてきて、<sup>えもの</sup>獲物は一匹も見つかりません。

「今日は、だめだのう。帰るとするか」と、おじいさんはつぶやきました。

すると、その時です。向こうの木のかげで、バタバタッと何かあばれているではありませんか。「はて、ありゃあ、何かいな」。近寄ってみると、それはわなにかかって、もがいている一羽の鶴でした。

「かわいそうに。助けてやろう」。

おじいさんは、鶴の足をはさんでいるわなをはずしてやりました。たちまち、鶴は大きくはばたいたかと思うと、うれしそうに空へ舞い上がっていきました。

それから、いく日がたった雪の晩のことです。

トントン……、トントン……。誰か戸をたたく者があります。

「今じぶん、誰じゃろ」。

戸を開けてみると、一人のかわいい娘が雪を<sup>かぶ</sup>被って立っていました。

「私は旅の者ですが、道に迷って困っています。今夜一晚、泊めていただけないでしょうか」。

それを聞いて、やさしいおじいさんとおばあさんは言いました。

「さあ、どうぞ、どうぞ。こんな雪の晩じゃでな。こっちへ来て、あったまりなされ」。

「ご親切に、ありがとうございます」。

「いやいや。うちは、二人きりで、さみしいくらいじゃ。泊まってくれたら、うれしいが」。

おばあさんが言うと、娘はうれしそうに、にっこり笑って言いました。

「それではお言葉に甘えて、泊まらせていただきます。そのかわり、ほんのお礼のしるしに<sup>はた</sup><sup>お</sup>機を織ってさし上げましょう。でも、一つだけお願いががございます。私がいいと言うまで、決して、機を織っているところを見ないでいただきたいのです」。



娘は機織り機のある部屋に入っていました。しばらくすると、軽やかな機を織る音が聞こえてきました。トントンカラリ、トンカラリ……。

次の日になって、やっと娘は部屋から出てきました。手には、織り上げたばかりの布を持っていました。

「さあ、雪が止んだら、これを町へ持って行って売って来てくださいな」。

「おお、なんと見事な布じゃ」。おじいさんもおばあさんも目を見張りました。

その日も雪は止まず、娘はもう一晚、泊まることになりました。

そして、また機を織り続けたのです。

おじいさんとおばあさんは、娘がどうしてあんな見事な<sup>ぬの</sup>布を織れるのか、不思議に思えてなりません。

「ほんの、ほんの少しのぞいてみよう」と、そっと部屋の戸のすきまからのぞいてみました。「あっ！」なんと、そこにいたのは娘ではなく、一羽の鶴でした。



鶴が自分の羽を抜いては糸に混ぜて布を織っていたのです。

しばらくすると、娘が部屋から出てきて言いました。

「私は、あの雪の日に助けていただいた鶴でございます。ご恩返しにまいりました。姿を見られては、もうここにはいられません。どうぞ、いつまでもお達者で」。

たちまち娘はいなくなり、一羽の鶴が空へ舞い上がっていきました。

やがて、娘が織った布は驚くほど高く売れて、おじいさんとおばあさんは、いつまでも幸せに暮らしました。

## [二・「<sup>もも た ろ う</sup>桃太郎」]

昔々、ある村に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おばあさんが川で洗濯をしていると、川上から大きな桃が「どんぶらこっこ、どんぶらこ」、「どんぶらこっこ、どんぶらこ」と流れて来るのが見えました。

おばあさんが「甘い桃なら、こっちへ来い。<sup>にが</sup>苦い桃なら、あっちへ行け」と言うと、おいしそうな大きな桃がおばあさんの方へ流れて来ました。

おばあさんは、桃を拾い上げて家に持って帰りました。

夕方になると、おじいさんが帰って来たので二人で食べようと、まな板の上に桃を載せて切ろうとしました。

すると、大きな桃はパッと割れて、中から可愛い男の子が飛び出しました。

男の子は、元気よく「おぎゃあ。おぎゃあ」と大きな泣き声を出しました。

子供のいないおじいさんとおばあさんは大喜びで、男の子に「桃太郎」という名前をつけて大事に育てました。

「桃太郎」はご飯を一杯食<sup>いっぱい</sup>べると一杯分、二杯食<sup>にはい</sup>べると二杯分大きくなり、「一」教える  
と「十」まで覚え、「十」教えると「百」まで覚えました。

こうして、「桃太郎」はぐんぐん大きくなり、気がやさしくて力持ちで、賢い若者になりました。

そのころ、村の近くにある「鬼ヶ島」から悪い鬼どもが村に出てきて、村の人に乱暴したり娘をさらったり、物を盗んだりして、村人たちを大変困らせていました。

そのことを知った「桃太郎」は、ある日、おじいさんとおばあさんの前で両手をついて、「おじいさんとおばあさんのお陰で、こんなに大きくなりました。ご恩返しに、「鬼ヶ島」へ鬼退治に行つてまいります」と言いました。

おじいさんとおばあさんはびっくりして、止めさせようとしてしました。

しかし、「桃太郎」の気持ちが固いので、「鬼ヶ島」へ行く「桃太郎」のために、日本一の「きび団子」をたくさん作りました。

「桃太郎」は、おばあさんに作ってもらった「きび団子」を腰に下げ、新しい鉢巻をして、刀を差して、「日本一の桃太郎」と書いた旗を持って出発しました。

村はずれまで来ると、犬が「ワンワン」吠えながら「桃太郎」に聞きました。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこに行くのですか？」

「鬼ヶ島へ鬼退治にいくところだ」

「わたしを家来にしてください。お腰につけたきび団子を、一つください」。

「よしよし。きび団子をやろう。これを食べれば十人力になるぞ」。

「桃太郎」は、犬にきび団子を一つやりました。

同じように、「ケーン、ケーン」と鳴きながらやって来た雉<sup>きじ</sup>も、「桃太郎」からきび団子を一つもらって家来になりました。

「桃太郎」が、犬と雉を連れて「鬼ヶ島」へ向かって行くと、今度は、猿<sup>さる</sup>が「キャー、キャー」と叫びながらやって来ました。そして、猿も「桃太郎」の家来になりました。

「桃太郎」は犬と雉と猿の三匹の大將になって、勇<sup>いさ</sup>んで「鬼ヶ島」へ行きました。



「桃太郎」たちが「鬼ヶ島」に着くと、大きな黒い門が立っていました。

猿がその門をドンドン叩くと、中から赤鬼が「ど〜れ」と言いながら出て来ました。

「桃太郎」は、「我こそは、日本一の桃太郎だ。鬼どもを退治に来た。覚悟しろ！」と刀を抜いて切りかけました。

近くにいた小さな鬼は大騒ぎしながら、奥の方へ逃げて行きました。

奥では、たくさんの赤鬼や青鬼が、村から奪ってきた「ごちそう」で酒盛りの最中でした。

「何？桃太郎？何だ、子供じゃないか」と、鬼どもは馬鹿にしながら、「桃太郎」たちにかかってきました。

「桃太郎」と犬、雉、猿は、日本一のきび団子を食べているので、みんな千人力になっていました。

大きな鬼を相手に、「桃太郎」は刀を振るい、犬はかみつきの、雉は空から突っ付き、猿は引っかきました。

鬼たちは「助けてくれ〜、助けてくれ〜」と逃げ出そうとしました。

そこで、「桃太郎」は「待てっ。逃がさないぞ」と、鬼の大将を捕まえて「えいっ」とばかり、頭の上に持ち上げました。

すると、鬼の大将は、涙をボロボロ流しながら、「桃太郎」の前に手をついて、

「命だけはお助けください」と、<sup>あやま</sup>謝りました。

「桃太郎」は、「これから村の人たちをいじめたりしない、と約束すれば助けてやろう」と、言いました。

鬼の大将は、「これからは決して悪いことは致しません」と誓い、宝物を全部、「桃太郎」に差し出しました。

「桃太郎」は、おじいさんとおばあさんのお土産にするために、たくさんの宝物を車に積みました。

その車を、犬と雉と猿が、「えんやらや、えんやらや」と引いて、村へ帰りました。

おじいさんとおばあさんは大喜びで、「桃太郎」たちを迎えました。

それから、村は平和な楽しい村になりました。

そして、村人たちは「桃太郎」の勇氣と強さをほめ<sup>たた</sup>称えました。

### [三・「一寸法師」]

昔、ある所に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。子どもがいない二人は寂しく暮らしていました。そして、朝晩、神様にお願いをしました。

「指より小さい子でもいいですから、一人<sup>さす</sup>授けてください」。

すると、どうでしょう。不思議なことに、指先<sup>ゆびさき</sup>ほどの小さい男の子が生まれました。おじいさんとおばあさんは大変喜び、「一寸法師」と名付けて、たいそう可愛がり、大事に育てました。

それから何年かが経ちましたが、「一寸法師」はちっとも大きくなりません。いつまでも指先ほどの大きさのままでした。

ある日、一寸法師はおじいさんとおばあさんの前に来て頼みました。

「私は<sup>みやこ</sup>都へ行きたいのです。どうか、『<sup>わん</sup>お<sup>はん</sup>碗』と『<sup>はし</sup>箸』と『<sup>はり</sup>針』をください」。おじいさんとおばあさんは寂しい気持ちになりましたが、可愛い「一寸法師」のために、旅の準備をしてやりました。

「一寸法師」は『針』を刀の代わりに腰にさし、『お碗』の舟に乗り、『箸』を「<sup>かい</sup>櫂」にして、元気いっぱい都へ向かってこぎ出して行きました。どんぶらこ、どんぶらこ。おわんの舟に乗った「一寸法師」は何日も川を下って、やっと都へ着きました。



「一寸法師」が町の中を歩いていると、一軒の立派なお屋敷の前に出ました。そのお屋敷は偉いお<sup>とのさま</sup>殿様のお屋敷でした。

玄関に立って「頼もう、頼もう」と、大声を張り上げました。「何の用じゃ」と、家来<sup>けらい</sup>が玄関に出て来ましたが、どこにも人の姿がありません。

「おかしいぞ。声がするのに誰もいない」と、不思議に思ってまわりを探しました。「ほら。ここにいますよ」と、「一寸法師」が声をかけました。

家来は、やっと、はきもののそばに立っている小さな男の子を見つけました。

「ほほう。小さな子じゃのう」。

「私は一寸法師と申します。どうか、このお屋敷で働かせてください」と、「一寸法師」は頼みました。

「体は小さいが、なかなか元気者のようじゃ。よし、お殿様に頼んでみよう」と言って、家来は「一寸法師」をお殿様のところに連れて行きました。

「一寸法師」は、お殿様の手の平に乗って、きちんと座ってあいさつをしました。お殿様は「これはおもしろい」と、喜んで「一寸法師」を家来にしました。

「一寸法師」はお屋敷にお客が来ると、お殿様の手の平の上で、踊ったり、歌ったり、『針』を腰から抜いて剣の舞をして、みんなを喜ばせました。うわさは、お屋敷の中だけでなく、町中に広まり、「一寸法師」はたちまち人気者になりました。

お殿様には一人の娘がいました。お姫様は「一寸法師」を一目見るなり、気に入って片時もそばから放そうともしませんでした。お姫様が本を読む時は、「一寸法師」は机の上で頁<sup>ペーじ</sup>をめくり、遊びに行く時もいつも一緒でした。

ある春の日、お姫様は清水<sup>きよみず</sup>のお寺にお参りに行くことになりました。

その頃、都では恐ろしい鬼が出て来て、人のものを盗んだり、乱暴したり、若い娘をさらって行くので、みんな困り果てていました。

そこで、お殿様はお姫様のお供に強い家来を大勢つけました。

「一寸法師」もお姫様の肩に乗ってついて行きました。

無事にお寺の観音様<sup>かんのんさま</sup>へお参りし、帰り道のことです。

突然、二匹の大きな鬼が現れて、お姫様に襲<sup>おそ</sup>いかかりました。

お供の家来たちは、刀を抜いて闘いましたが、とてもかないません。鬼はお姫様を捕まえて、さらって行こうとしました。

「助けてえ、助けてえ」と、お姫様が叫びました。

その時、「一寸法師」が鬼の前に立ちはだかりました。

「我こそは一寸法師だ。この刀<sup>かたな</sup>でひと突きにしてみやう。悪いやつをこらしめてやる。覚悟しろ」。

「一寸法師」は、腰にさした『針』の刀を抜いて、鬼に向かって行きました。

鬼は、相手があまり小さいので、「わっはっはっ。生意気なやつだ。お前なんか一呑<sup>ひと</sup>みだ」と言いながら、「一寸法師」をつまんで、呑み込んでしまいました。

ところが、「一寸法師」は鬼の腹の中で大暴れです。

『針』の刀を振り回<sup>まわ</sup>して、腹の中を突<sup>はら</sup>つつき回<sup>なかつ</sup>しました。

「いてててっ。痛いっ」と、鬼は苦しんで、「一寸法師」を吐き出しました。

もう一匹の鬼が「一寸法師」を捕まえようとしたので、「一寸法師」は鬼の顔に、はい上がって、『針』の刀で鬼の目玉を突き刺しました。

鬼たちは、「こりゃあ、かなわん。助けてくれ」と叫びながら、一目散に逃げて行きました。

「お姫様。もう大丈夫ですよ」と、「一寸法師」はお姫様を助け起こしました。

「お前のおかげで助かりました。本当にありがとう」と、お姫様は「一寸法師」にお礼を言いました。鬼が逃げ出した後に、小さな物が落ちていました。

お姫様は、「これは鬼が落としていった物だ。願い事が何でも叶う“打ち出の小槌<sup>こづち</sup>”という宝物に違いない」と言いました。

そこで、「一寸法師」はお姫様にお願いをしました。

「それでは、私の背が高くなるようにしてください」。

お姫様は“打ち出の小槌”を振りながら、「一寸法師の背よ、高く高くなあれ」と祈りました。すると、「一寸法師」はみるみるうちに大きくなり、りりしい若者になりました。

やがて、「一寸法師」はお姫様のおむこさんになり、立派なお殿様になりました。

そして、おじいさんとおばあさんを都に呼び寄せ、みんなで幸せに暮らしましたとき。

## [四・「<sup>かさ</sup>じぞう

昔、あるところに、とても貧乏なおじいさんとおばあさんが住んでいました。

年が暮れて、大みそかのことです。

近くの家からは、お餅<sup>もち</sup>をつく音がペッタン、ペッタンと聞こえてきます。

明日はお正月だというのに、おじいさんとおばあさんの家には、お餅を買うお金がありません。

おばあさんが「どうしやものかのう」と、ため息をつくので、おじいさんが言いました。

「そんじゃ、山へ行って、「たきぎ」（注）でも取ってきて、町へ売りに行ってこよう」

それから、おじいさんは山へ、たきぎを取りに行き、それを持って町へ出かけて行きました。

「たきぎはいらんか。お正月のたきぎはいりませんか」

と、おじいさんは一生懸命売りに歩きましたが、ちっとも売れません。

夕方になって、とうとう雪まで降り始めてきました。

寒さはひどくなり、お腹<sup>なか</sup>はすくし、疲れてくたくたになったので、おじいさんは、仕方なく、帰ろうと町はずれまで来ました。

そこで、<sup>かさ</sup>売りのおじいさんに出会いました。

「どうですか。笠は売れましたか」と、おじいさんが尋ねると、笠売りのおじいさんは

「いんや。五つ持ってきた笠が一つも売れねえ。どうしたもんかのう。困ったもんだ」と言いました。

二人は、ため息をつきました。

そして、どうせ売れないなら、同じ物を家に持って帰っても仕方がない。

「いっそのこと、取り替えっこしよう」ということになり、二人は、「たきぎ」と五つの笠を交換して、帰ることにしました

おじいさんは、笠を背負って、雪の降る野原の道を、とぼとぼ歩いて行きました。

雪はどんどん降ってきて、あたりはもう薄暗くなってきました。

「おお、寒い、寒い」

ふと気がつくと、道ばたに石の<sup>じぞう</sup>地蔵さんが六つ並んで立っていました。

「おお、頭にこんなに雪をかぶって。お地蔵さんも、さぞ、寒かろう」

と、おじいさんは、お地蔵さんの頭の雪を払うと、自分の持っている笠を一つずつ、かぶせてあげました。





一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。

お地蔵さんは六つですから、笠が一つ足りません。

「弱ったなあ。どうしたものか」とおじいさんは考え込みました。

そして、自分がかぶっている古い笠を取って、一つ残ったお地蔵さんの頭にかぶせてあげました。

「たきぎ」が一つも売れないため、手ぶらで帰ってきたおじいさんは、その日のことをみんなおばあさんに話しました。

「そりゃ、良かったのう。お地蔵さんも、あったかいと言うて、喜んでいなさるよ」  
おばあさんは、おじいさんのしたことを、ほめました。

そして、二人は、食べるものもないので、その晩は早く寝てしまいました。

雪がしんと降り積もって、あたりが静まり返った夜半、遠くから何やら歌のような掛け声が聞こえてきました。

「よいやさの、えいさ」

「どっこいしょ、それ、どっこいしょ」

何やら重たい物を運んでいるようです。

じっと聞いていると、掛け声はだんだん近づいてきて、家の前で止まりました。

「笠をかぶせてくれたおじいさんの家は、ここかねあ」

という声がしたかと思うと、ドスンというものすごい物音がしました。

「いったい、夜中に何の騒ぎだろう」

と、おじいさんとおばあさんは、そっと起き出して、戸を開けて外をのぞいてみました。

すると、戸口に、大きな袋が置いてありました。

そして、吹雪の中を、六つのお地蔵さんの姿がだんだん遠く、小さくなっていくのが見えました。

二人が大きな袋を開けてみると、中には、大判、小判（注）がいっぱい入っていました。

《注・たきぎ＝薪。そのまま、燃料として使える木の枝など》

大判、小判＝室町時代から末期から江戸時代末期に造られた  
金貨・銀貨)

